

『プランB』第24号=2009年12月1日に掲載

吉岡吉典さんを追悼する

犬丸義一

Inumaru Giichi

私と吉岡吉典さんとの出会いは、歴史科学協議会の機関誌『歴史評論』（校倉書房）が一九六三年に「特集 日本と朝鮮」を組んだ時いらいます。この号（九月号）に、吉岡さんは「関東大震災時の虐殺事件に学ぶ二つの立場」という論文を書きました。六五年六月号には巻頭論文を書いています。タイトルは「明治社会主義者と朝鮮——日韓会談反対闘争によせて」です。この副題にもあるように、この年に日韓条約が結ばれました。六八年八月号の特集は「米騒動五〇年」で、吉岡さんは「植民地朝鮮における一九一八年——米騒動と朝鮮」を書いています。この論文によって、吉岡さんは歴史研究者のなかでも高い評価を受けることになりました。米騒動についての研究はかなり進んでいて、各県ごとにその実態が明らかになっています。朝鮮でも同じような民衆の運動が起きていたことは知られていましたが、その実態は分からなかったため、吉岡さんの研究は大きな注目をあびました。

もう昔のことなので、若い人には関心が薄いかも知れませんが、日本共産党が一九五〇年に分裂していたころ、吉岡さんは所感派に属していました。この分裂は五五年の六全協で団結を回復するのですが、警察の資料のなかにはこの会議の参加者が記録されていて、それによると、吉岡さんは島根県委員長という肩書きになっています。

吉岡さんは松江高校を中退して、大学には進学せずに、「ヴィ・ナロード＝人民の中へ」を文字通り実践するために革命運動の道を選び、職業革命家の道を歩み始めました。高校時代の同級生には歴史学の松尾尊允さんがいます。私がこのことを知ったのは、随分あとになってからですが、二人は親しい付き合いがあり、吉岡さんが東京で生活するようになってからも帰省する折りに、京都の松尾さんの家を訪ねたりしたそうです。

共産党はその後、五八年に第七回党大会を開きますが、この時期には党内民主主義が貫かれ、党内の対立する意見が激しく討論されました。「第七回大会をめざして」と表紙に書き込んで『団結と前進』という全党討論誌が五号発行されました。その第四集（五八年四月）に吉岡さんは「党章規約部分について（上）」（目次では「規約問題について（上）」）を、第五集（五八年七月）に「党章規約部分について（下）」を書いています。その時の肩書きは文末に「島根県委員」と記されています。第四集に論文を書いている人を挙げると、米原昶、内藤知周、神山茂夫、安東仁兵衛、片山さとしなどがいます。米原さんを除けば他の人はみなその後、党を離れてしまいました。『団結と前進』では党の綱領をめぐる情勢評価や革命の形態を争点にさまざまな問題が縦横に論じられていて、興味深いものがありますが、党の規約をめぐる論じているのは異色です。吉岡さんは、党の民主的運営と

いう問題に当時から強い意識をもっていたのでしょう。

ついでに私自身が当時どういう立場だったかについて一言すると、私は五〇年代後半には神奈川県にあった私立浅野学園で歴史の教師をしていました。私は、当時の論争点であった日本資本主義の評価については「帝国主義」とする認識でした。ですから、一九六一年の第八回党大会の時には、綱領では「帝国主義」としていませんでしたから、「保留」という態度でした。「全員賛成」というのが立派とされている時期でしたから、他の県では賛成以外の反対や保留の党員は党内に留まることができずに、離党・分裂していきましたが、神奈川の場合には県委員長が中西功で、彼は「反対」だったのを「賛成」に変えたばかりで、私の「保留」も容認され、離党することはありませんでした。当時、安東仁兵衛（私より一歳上）などが『現代の理論』という雑誌を大月書店から出したのですが、その第六号に、私の論文——天皇論——が掲載されることになっていたのですが、この雑誌は五号で廃刊となり、私の論文も完成しませんでした。安東や上田兄弟や社会党にいった高沢寅男や私などは敗戦直後の東大学生細胞と一緒に活動していました。

時代は飛びますが、一九八二年に『日本共産党の六十年』が発刊されたあとに、『文化評論』で座談会が企画され、学者側から塩田庄兵衛さんと私、党側から小林栄三さんと吉岡さんが出席して活発に討論したことがありました（八三年四月号）。

もう一つ、吉岡さんのお仕事としては見逃せない大きなことがあります。吉岡さんは、上田耕一郎が「赤旗」編集局長をしていた時期に次長として働いていて、その後に「赤旗」編集局長になりました。さらに一九八二年の第一六回党大会で常任幹部会委員に選出され、八五年の第一七回党大会で「綱領の一部改正についての報告」をおこなっています。この綱領改定によって、いわゆる「全般的危機論」が取り下げられることになったのですが、同時に「日本の帝国主義復活」についても従来よりも踏み込んだ認識を明らかにしました（『前衛』五三〇号、一二八頁）。前に述べた論点の延長です。この部分の報告を副委員長の上田さんではなく、吉岡さんがやったことには深い意味があったのではないのでしょうか。

参議院議員としても党の幹部としても現役を退いた後のことはよく知りませんが、今年三月一日にソウルで急死したことは本当に残念で深く惜しまれます。終生のテーマであった朝鮮を探究し、「三・一蜂起」の記念講演（主催：アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会）を現地で話した、その日に亡くなったというのも象徴的運命的です。遺稿「戦後日本と『韓国併合条約』」が、『前衛』に連載されました（二〇〇九年一〇月、十一月）。

最後になりますが、吉岡さんはとてもバランスの取れた人格者で、党外の良識者とも意外な人脈を広く保っていたようです。今度、私も発起人となって「吉岡吉典さんをしのぶ会」が開かれますが、恐らく多彩な人びとが集まるのではないのでしょうか。

（いぬまる・ぎいち／現代史研究者・元長崎総合科学大学教授）